

潟語(十二)

文・小西 一三
絵・小西 由紀子

潟船造り その①

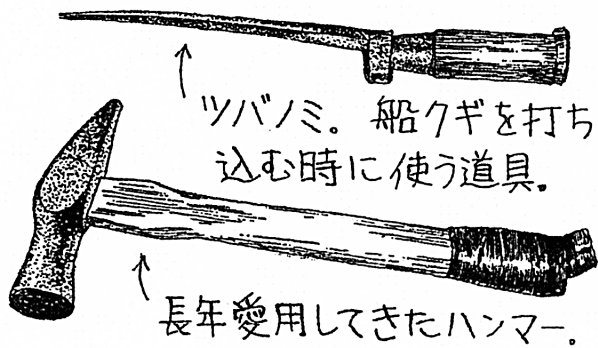
八郎潟の漁業に欠かせなかったのが、底が平らで独特の形をした「潟船」でした。自性院のお隣りに住む伊勢谷敬蔵さん(八三)は、潟船造りの優秀な船大工として知られたお方。あれこれ話をうかがいました。

「なんといっても御山の官木」

俺は十五歳で学校を出てから船大工の親方に弟子入りし、二十一歳で年季が明けた。「さあ、自分の手で船をこしやるぞ」と思った時には、御山の官木(男鹿の国有林の天然

秋田杉)がなかなか手に入らない時代になってしまった。

御山の官木は風の強い厳しい場所です。木目が細かくて丈夫なんだ。それと比べて風の弱い場所です。育った民木はスカスカした感じで、船を造ってもすぐ腐る。御山の官木で造った潟船は三十年以上ももつども、民木で造った船は十年そこそこ。なんぼ値段が高げぐでも、官木の方がいいわけだ。太さは三尺五寸もあってな、



それはそれはいい杉だった。

そもそも今の潟船の原形がでぎだのは、明治時代の末頃で、今戸のイマサカさんという人が伝えたという。それに聞いた。イマサカさんは琵琶湖の方から来た人で、琵琶湖には潟船に似た船があるそう。潟船がでぎる前は、それこそ小せボートのような船を使っていたと聞いてるな。

普通の潟船は長さ四十二尺で幅は三尺六寸。高さは二尺三寸から四寸で、船の反り具合は職人によって少しづつ違ってたもんだ。材は側が一寸五分で下は二寸五分と、船の下は厚くなってるな。

ところが御山の官木が手に入りになくなった時代。俺はしかだねぐ、仕事を求めて北海道のカラフトさ渡ったんだ。

船造りの道具は、あの平成3年の台風19号でほとんど流されてしまっただけのようだな。本当にすごかった。

